

雜餉隈遺跡8

—雜餉隈遺跡第19次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1282集



遺跡略号 ZSK-19
調査番号 1429

2016

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入れ口として古来より繁栄してきました。市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの義務であります。

雜餉隈遺跡が所在する博多区南部の昭南町・新和町一帯は奴国(のぞみくに)の王都がある春日市に隣接する地域です。公共交通機関の便はよく、古くから開発が行われ、都市化が進んでいる地域です。

本市においては、各種開発事業によって、やむを得ず失われる埋蔵文化財については発掘調査を実施し、記録保存によって後世に伝えるよう努めています。

本書は、戸建住宅建設に先立って、平成26年度に実施した雜餉隈遺跡第19次調査の成果を報告するものです。調査では古代の堅穴住居跡を検出しました。近隣の調査区でも同時期の堅穴住跡が見つかっており、一帯に古代の集落が存在することが分かりました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者のディー・アンド・エイチ株式会社様はじめとし、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

凡 例

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成26(2014)年度に福岡市博多区昭南町2丁目17番で実施した発掘調査の報告書である。
- (2) 発掘調査は上記の主体により行われ、調査の担当は山崎龍雄が行った。
- (3) 遺構実測と遺物実測は山崎が行い、出土遺物の整理・収蔵作業については古賀美江が行った。
- (4) 遺構・遺物の撮影は山崎が行った。
- (5) 本書に使用した図面の浄書は山崎が行った。
- (6) 本書に使用した方位は磁北であり、真北とは $6^{\circ}18'$ 西偏する。
- (7) 出土金属製品の保存処理については埋蔵文化財センター上角智希が行った。
- (8) 土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。
- (9) 調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
- (10) 本書の執筆・編集は山崎が行った。

雜餉隈 19次調査情報

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
ZSK-19	1429	福岡市博多区昭南町2丁目17番	80.76 m ²	45 m ²	戸建住宅建設	2014.10.06 ～10.20	山崎龍彦

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の組織	1
II	遺跡の立地と歴史的環境	2
III	調査の記録	2
1	調査の概要	2
2	遺構と遺物	2
3	小結	9

挿図目次

Fig. 1	調査区周辺の遺跡 (1/25,000)	2
Fig. 2	調査区位置図 (1/5,000)	3
Fig. 3	遺構全体図 (1/80)	4
Fig. 4	調査区周辺の地形 (1/200)	4
Fig. 5	SC06・14、SX15 (1/60)	5
Fig. 6	SC06 出土遺物 I (1/3)	6
Fig. 7	SC06 出土遺物 II (1/3・1/4)	7
Fig. 8	SC14、SK19、表探出土遺物 (1/3)	8

写真目次

PL. 1	(1) 東側全景 (東から) (2) 西側全景 (東から)	10
PL. 2	(1) SC06 遺物出土状況 (南から) (2) SC06 完掘状況 (南から) (3) SC06 罐の状況 (南から) (4) SC14 東側 (南から) (5) SC14 西側 (西から) (6) SC14 罐の状況 (東から) (7) SX15 防空壕西側 (東から)	11
PL. 3	SC06 出土遺物 (縮尺不統一)	12

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は同市博多区昭南町2丁目17番に戸建住宅建設の為の埋蔵文化財の有無についての照会（事前審査番号26-2-493）を平成26（2014）年9月8日付けで受理した。これを受け埋蔵文化財調査課は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地の雑餉隈遺跡に含まれていることで、確認調査を実施した。現地表下15～45cmで遺構を確認し、遺構の保全などについて申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。その後、平成26年9月26日付けでディー・アンド・エイチ株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、同年10月6日から発掘調査を開始した。調査は10月20日まで実施し、翌平成27年度に資料整理および報告書作成を行った。

2. 調査の組織

調査委託 ディー・アンド・エイチ株式会社

調査主体 福岡市教育委員会（発掘調査：平成26年度、資料整理・報告書作成：平成27年度）

調査総括 文化財部埋蔵文化財調査課長：常松幹雄

同課調査第1係長：吉武 学（26年度）

同課調査第2係長：榎本義嗣（27年度）

庶務 埋蔵文化財審査課 管理係長：内山広司（26年度）

：大塚紀宣（27年度）

管理係：横田 忍（26・27年度）

事前審査 埋蔵文化財審査課事前審査係長：佐藤一郎（26・27年度）

主任文化財主事：池田祐司（26・27年度）

同課 文化財主事：比嘉えりか（26年度）

：大森真衣子（27年度）

調査・整理担当 埋蔵文化財調査課文化財主事：山崎龍雄

整理・発掘作業員 古賀美江、上野美智子、緒方圭子、久保サヨ子、中島秀司、野内聖司、山下直美

II 遺跡の立地と歴史的環境 (Fig. 1)

本章については本市報告『雑餉隈遺跡4』（第569集、1998年）を基にして、他報告の記述も交えて雑駁ではあるが述べる。雑餉隈遺跡の東を大野城市、西を春日市に挟まれた福岡市の最南部に位置する。地理的には春日丘陵の東辺にほぼ並行して伸びる台地上に立地する。この台地は北西方向から多くの谷があり込んで枝分かれしており、この舌状台地ごとに、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、麦野A～C遺跡などの遺跡が分布する。

本遺跡で最古の遺物は、旧石器時代の石刀・剥片などの遺物がある。各地点で出土しており、遺跡が広く分布すると思われる。縄文時代については明確ではないが、縄文期の石鏃が後世の擾乱から出土している。弥生時代になると遺構・遺物は急激に増加し、各地点で遺構が確認される。14次調査『雑餉隈遺跡5』（第868集、2005年）では弥生時代早期の夜白系の弥生土器を伴う土坑や、有柄式の磨製石刀や磨製石鏃が副葬された木棺墓が見つかっている。古墳時代は遺構・遺物は不明であるが、古代になると遺構・遺物は急増する。雑餉隈の地名は現在の大野城市に雑餉隈町として残る。調査地点がある昭南町は麦野村に属する。『福岡県の地名』（2004年平凡社）によると、雑餉隈の地名の由来は江戸時代の編纂物『筑前国続風土記』には、大宰府官人の雑掌（元來は諸官の雑務を司る者）がいたことによるといわれる、明治時代の『福岡県地理全誌』では雑賓隈（享和二年『明細記』、雑掌隈とも記されるとある。確証は出来ないが、古代の官衙的な大型建物群が北側の麦野A遺跡で見つかっており、広い範囲で古代の竪穴住居跡が見つかっている。中世以降の時

期は遺構の検出は少ないが、2kmほど北の麦野A遺跡地点で戦国期の堀で囲まれた館跡が、大野城市山田の御笠の森遺跡（註1）では、堀で区画された屋敷群が見つかっている。『豊前覚書』（註2）では麦野村に要害を築いたとある。古代官道や、近世は日田街道が通る交通の要地であり、街道沿いに村落が分散して分布していたものと思われる。

III 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig. 1 ~ 4, PL. 1)

本調査区は雑餉隈遺跡の南西部、JR 南福岡駅より約 400 m 南に位置する。春日から伸びる低丘陵上に立地し、標高は現地表で約 21 m を測る。調査区南側には第12次調査、少し離れた北側には第16次調査地があり、両地点で奈良時代の堅穴住居が検出されている。調査は調査区を東西 2 分割して行った。調査はまず東側から行い、その後廃土を反転し西側の調査を行った。基本層序は遺構面までは東側地表下 5 cm ほど、西側は緩やかに下傾し、その上に黒色の包含層が堆積する。遺構面は鳥栖ローム面である。主な検出遺構は堅穴住居跡 2 棟、太平洋戦争時の退避壕（防空壕）1 基、ビット群など。堅穴住居跡の時期は奈良時代である。

2. 遺構と遺物

① 堅穴住居跡 (SC)

SC06 (Fig. 5 ~ 7, PL. 2-1 ~ 3・3)

調査区北東隅で検出した住居跡。確認規模は長軸長 2.7 m 以上、短軸長 2 m 以上、深さ 0.3 m を測る。床面は貼床で、壁下には溝が巡る。壁溝は西側で二重に巡る状況を示し、建替えの可能性がある。竈は北西壁沿いにあり、西側に 40 cm ほど突出させ、その内側には竈袖の粘土が残る。竈前面はビット状に座む。埋土は黒褐色土を主体とし、灰白色粘土や焼土・炭化物を含んでいた。住居内には灰白色粘土ブロックが集中する所がある。床面密着の遺物はなく、東側壁沿いで床面より浮いた状態であり、住居廃絶後投棄された状況を示す。東壁土層を見ると上面から掘り込んだような土壤の変化があるが、一部の調査のため、詳細は不明である。



Fig.1 調査区周辺の遺跡 (1/25,000)

1. 雜餉隈遺跡 2. 南八幡遺跡 3. 麦野 A 遺跡 4. 麦野 B 遺跡 5. 麦野 C 遺跡 6. 三筑遺跡 7. 笹原遺跡 8. 井相田 A 遺跡
9. 井相田 C 遺跡 10. 井尻 B 遺跡 11. 岡本道路群 12. 須玖遺跡群

出土遺物は奈良時代の須恵器、土師器が出土する。1～22は須恵器。1～6は蓋。いずれも口縁端部が屈曲し、天井部に摘みが付く。調整はいずれも天井部外面はヘラケズリ、その他は回転ナデで、内面はナデ。1は上～中層出土。頂部に鉗状の摘みが残る。歪むが、口径 11.7 cm、器高 2.8 cm を測る。色調黄灰色で、胎土は精良。2は扁平な蓋の口縁部 1/6 片。復元口径 13.0 cm を測る。色調は暗灰色で、胎土は精良。3は北東側下層出土。1/6 片で復元口径 14.6 cm を測る。器壁は摩滅し、調整は不明。色調は灰色、胎土は精良、焼成やや不良。4は北東側下層出土。鉗状の摘みがある。色調灰色、胎土は精良、焼成は良好。5は南西部の中層と SP02 出土。1/4 片で復元口径 15.0 cm を測る。色調は灰色、胎土は精良、焼成は良好。6は北東側上層出土の扁平な大型の蓋 1/8 片。復元口径 23.0 cm を測る。色調は灰色、胎土は 1～2 mm 白色粒子多く混入。7～11は高台付坏。調整の基本は体部回転ナデ、外底部はヘラケズリで、ナデを加える。7は東側で出土。1/2 弱片。復元口径 13.6 cm、器高 4.1 cm を測る。色調は褐灰色で、胎土は白色微粒多く含む。8は南西隅中層出土。1/3 片で復元口径 14.3 cm、器高 3.3 cm を測る。色調は灰黄色、胎土は精良。9は上層出土。底部 1/4 片。復元高台径 11.6 cm。色調は灰オリーブ色、胎土は精良。10は上層出土。1/3 片強。底が深く、復元口径 15.5 cm、器高 5.6 cm を測る。器壁は雑な仕上げ。色調は灰黄色で、胎土は精良。11は北東側下層出土。1/6 片で復元口径 15.2 cm を測る。調整はヨコナデ、色調は灰黄色で、胎土精良。12は北東側上層。鉢で 1/6 片。復元口径 19.2 cm を測る。色調は灰黄色、胎土は精良。13は東側で出土。壺の底部片。外底部ヘラケズリ、体部は丁寧なナデ。高台付には下に敷いた敷物痕が残る。色調は内外面灰色で、胎土白色微粒子含む。14～15は壺。14は壺前面で出土。肩部はカキ目。斜め平行叩き痕残る。内面ヨコナデ。15は14と同一個体と思われ、上層～下層バラバラで出土。外面上半カキ目、下半木目直交叩き、内面はヨコナデで、同心円状當て具痕残る。色調灰黄色で、胎土は精良。16～18は皿。16は壺前面で出土。底部片で一部口縁部残る。復元口径 19.4 cm、器高 2.4 cm を測る。器壁は摩滅し調整不明。色調は灰白色、胎土は精良。17は北東部上層出土。1/6 片で、復元口径 21.2 cm、器高 2.3 cm を測る。器壁は摩滅するが、外底部はケズリ。色調は灰オリーブ色、胎土は金雲母微粒子含む。18は壺下層、前面出土の破片が接合。高台が付く皿か盤底部。復元高台径 18.1 cm を測る。

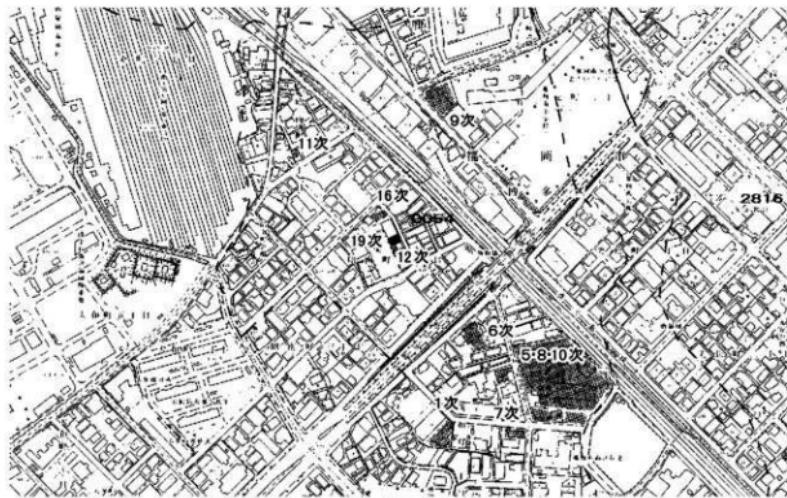


Fig.2 調査区位置図 (1/5,000)

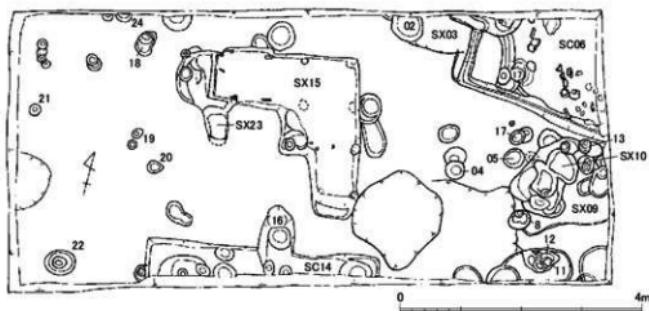


Fig.3 遺構全体図 (1/80)

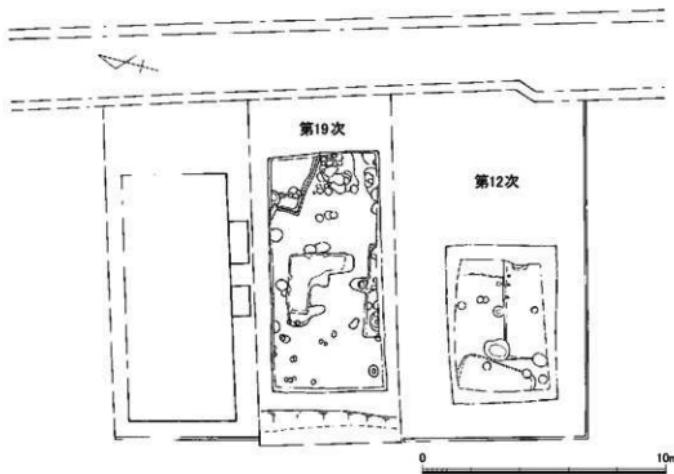


Fig.4 調査区周辺の地形 (1/200)

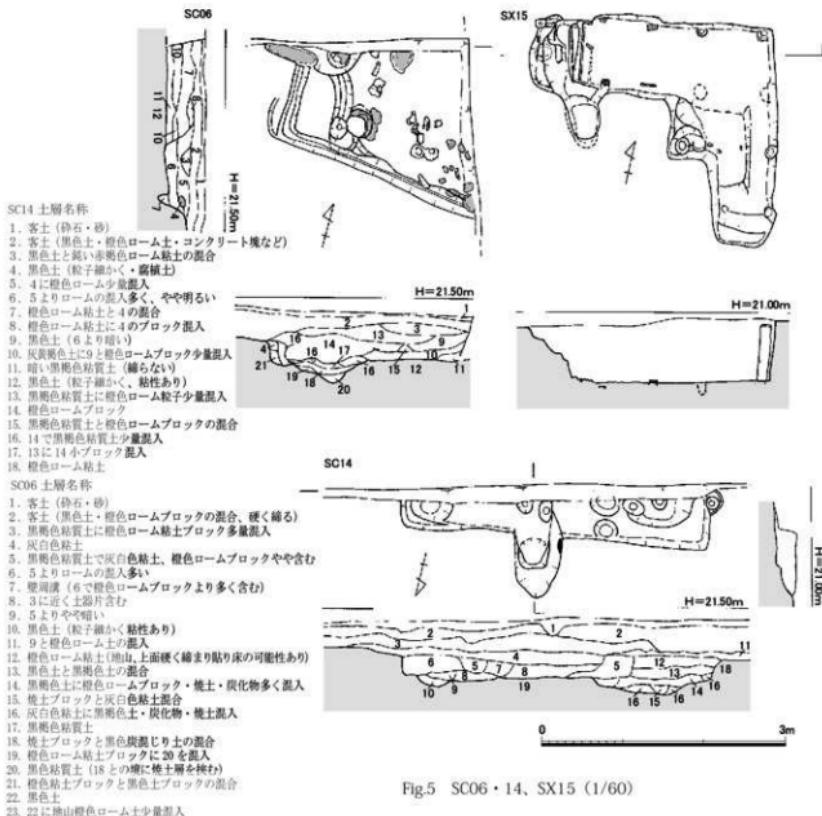


Fig.5 SC06・14, SX15 (1/60)

外底部ケズリで、全体はナデ。色調は灰色、胎土は精良。19は東壁沿い出土の高坏1/3片。坏部が皿状を呈す。復元口径23.7cmを測る。坏部外底はヘラケズリ。その他の調整はナデ。色調は灰黄色、胎土は1mm内外白色砂粒含む。20は東側で出土。壺胴部片。外面自然釉がかかり、密な平行タタキ、内面當て具痕が残る。色調はオリーブ黒色で、胎土は白色微粒子少量混入。21・22は壺内出土。21は蓋天井部片。天井外面はヘラケズリ、その他はナデ。色調は灰色、胎土は精良。22は皿1/6弱片。復元口径16.2cm、器高2.0cmを測る。器壁は摩滅があるが、外底部は丁寧なケズリ、体部はヨコナデ。色調は灰黄色を呈し、胎土は精良。

23～28は土師器。23～26は甕。23・24は北東部下層出土。23は甕の口縁部小片。内外面ハケ目。色調は灰色から橙色、胎土は2mm内外砂粒多く混入。24は頸部1/5片。外面ハケ目、内面ヘラケズリ。25は中層出土。口縁部1/6片。復元口径19.8cmを測る。外面ハケ目、内面はヘラケズリ。色調は灰色、胎土は1～2mm砂粒多く含む。26は甕前面出土。大型の甕上半部1/4片。復元口径30.8cmを測る。体部外面タテハケ目、内面は口縁部ヨコハケ目、体部はヘラケズリ。色調は純い黄橙色、胎土は2～3mm石英・長石粒子多く含む。27・28は焼塙土器。27は甕前面出土。いずれも1/3片で、27は復元口径12.2cm、器高約7cmを測

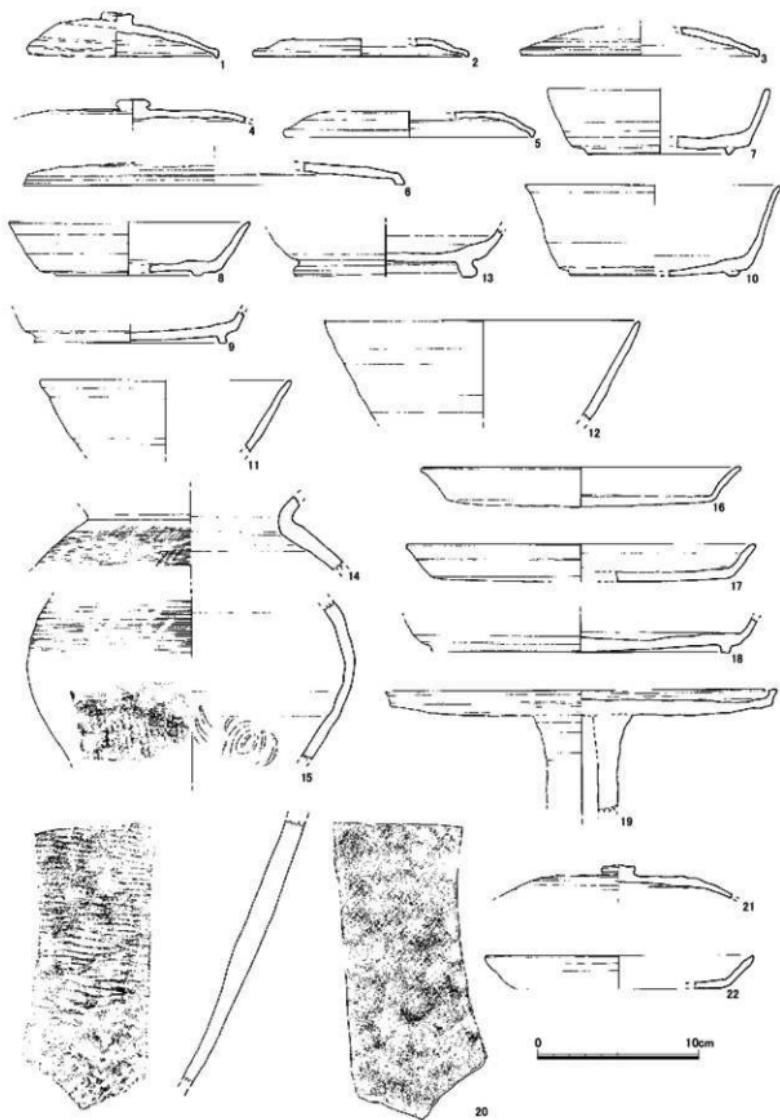


Fig.6 SC06 出土遺物 I (1/3)

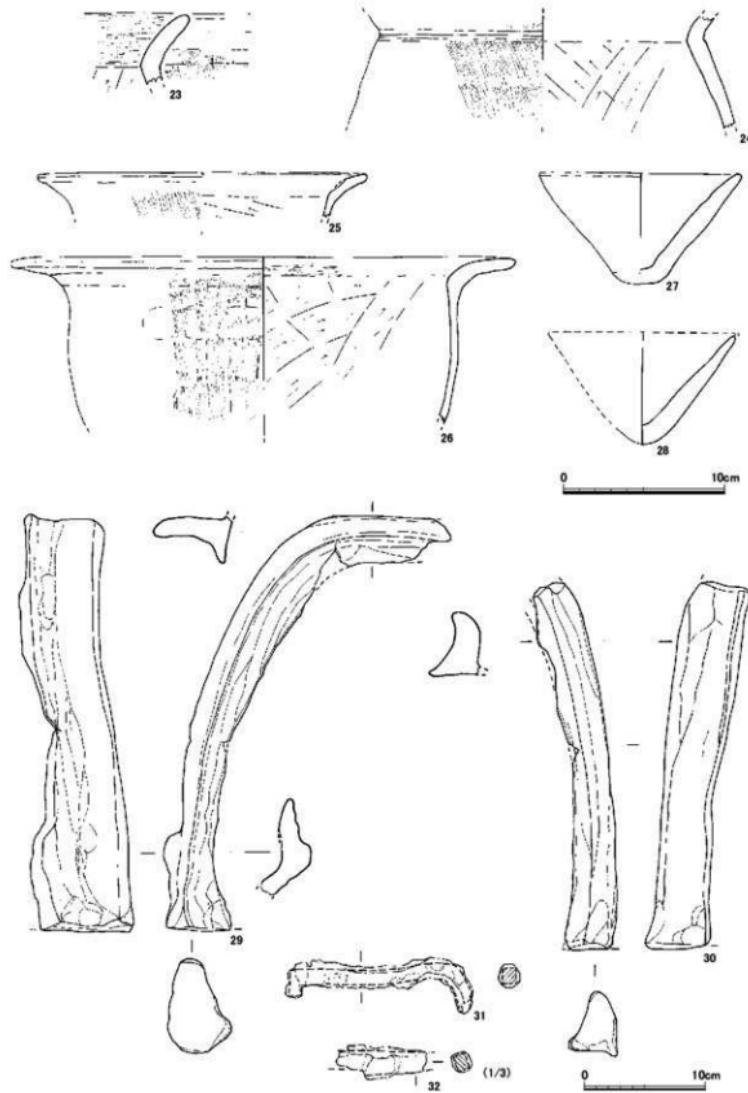


Fig.7 SC06 出土遺物 II (1/3 • 1/4)

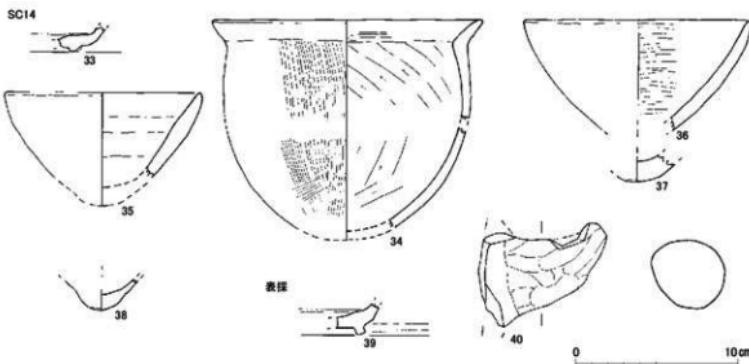


Fig.8 SC14 表探出土遺物 (1/3)

る。28は口径約12cm、器高7cm弱。器表面は摩滅し調整は不明。色調は27は橙色、28は鈍い赤褐色を呈し、胎土は1~2mmの石英・長石粒子多く混入。29・30は移動式竈の底部分。調整は外側ナデで、内面はケズリ。色調は橙色で、底部は黒ずむ。胎土は石英・長石粗砂粒を多く含む。31・32は鉄製品。いずれも竈下層出土。31は鏡状に両端が曲がる。全長7.6cmを測る。鋸がひどいが断面は方形。径は約0.6cm。32は不明鉄片。残存長3.6cm。全体に鋸がひどいが断面は方形。径は0.6×0.5cm。

SC14 (Fig. 5・8, PL. 2-4~6・3)

調査区南壁で検出した。大半が南隣の第12次地点にあるが、12次地点では検出されておらず、規模は大凡ではあるが、確認長が東西3.83mを測り、一辺4m内に収まると推定する。壁面の残りは0.2mを測る。埋土は黒色土または黒褐色土で、下層は橙色ローム粘土ブロックとなり、貼床面があった可能性があるが、狭い調査範囲で確証はない。北側中央に竈があり、0.8m突出する。竈自体は壊されているが、内部は焼土ブロック混じり土で、床面はピット状に窪む。壁は一部焼けている。住居にテラス部分があるとすれば、北側に大きくなる可能性がある。

出土遺物は土師器・須恵器が出土するが、量は少ない。33は須恵器の高台付壺底部小片。調整はナデ。色調は黄灰色を呈し、胎土は精良。34は小型の甕。甕部分の破片と合成復元。復元口径16.3cmを測る。体部外面は粗いタテハケ目で二次的に被熱。内面は口縁が粗いヨコハケ目、体部はヘラケズリ。色調は鈍い赤褐色を呈し、胎土は1~2mm石英・長石粒子多く混入。35~38は焼塙土器。いずれも尖底の形態である。35・36は底を欠く口縁部片。いずれも歪みがあるが、推定で復元。36は1/8片で、35よりやや大型か。調整は、いずれも外側は摩滅がひどく不明。内面はヨコナデ。色調は明褐色・明赤褐色で、胎土は1~2mmの石英・長石粒子を含む。37・38は底部片で、37は36と同一個体かは不明。器表は摩滅し、調整は不明。38の内面は焼けたのか赤くなっている。焼塙土器は竈内から出土しており、この部分で塙が焼かれた可能性がある。

② 防空壕 (SX)

SX15 (Fig. 5, PL. 2-7)

調査区中央部で検出した防空壕(退避壕)。L字形の形態で東西3m、南北2.7m、幅0.8~0.9m、残存深さ0.75mを測る。現地表から測っても深さは1m程である。壁沿いには天井を支えた支柱の木柱や痕跡のピットが残る。入口は西側で、横板で階段を造っている。大人が身を隠す位の深さで、天井上部を土で覆

うが、直撃弾、火災などにあったら一たまりもなかつたであろう。同様の防空壕は周辺でも確認されている。近くに軍需工場「九州兵器」(現在の渡辺鉄工所の位置、註5)があり、周辺も当然空襲を受けたのであろう。廃棄後の戦後の遺物が若干出土しているが、ここでは図示しない。

③ 表探遺物 (Fig. 8)

39は須恵器の高台底部片。色調は黄灰色で、胎土は1~2mm石英・長石粒子混入。40は土師器把手片。色調は純い黄褐色を呈し、胎土は1mm内外白色粒子少量含む。

3. 小 結

本調査区で検出した遺構は古代の堅穴住居跡2棟である。主軸方向は異なり、両者に時期差が認められる。時期的には8世紀奈良時代のものである。SC06は前半から後半の遺物があり、出土状況を見ると廃棄された状況を示すことから、遺物の時期幅はそれを示している。南側の第12次地点(註3)と比較すると、SC06は12次のSC01、SC14はSC02と主軸が同方向である。報告ではSC01が8世紀前半、SC02が8世紀後半と位置付けている。従って、本地点の住居も8世紀前半のSC06が廃絶したあと、後半にSC14が建てられたのであろう。SC06の焼塙土器は、SC14のものと同形態で、SC14の居住人がSC06に廃棄したものと推定する。第5・8・10次調査地点の第101・102住居(註4)でも出土例がある。102は突出した竈を持つ形態で、塙を専業的につくる人の住居である可能性がある。

参考文献

- 註1 御笠の森遺跡は大野城市山田に所在する遺跡。1988年の福岡県教育委員会による調査以来、大野城市教育委員会によって度々調査が行われ、縄文時代～近世初期に至る、各時代の遺構が調査されている。
- 註2 『豊前覚書』は元和元年(1615)に旧菅崎座主で立花家の家臣であった城戸清隆が、父豊前守知正の物語や自らの見聞体験などを記したもの。
- 註3 福岡市教育委員会『中南部(7)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第783集 2004年
- 註4 福岡市教育委員会『雄納隈遺跡4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第569集 1998年
- 註5 川口勝彦・首藤卓茂『福岡の戦争遺跡を歩く』有限会社 海鳥社 2010年



(1) 東側全景（東から）



(2) 西側全景（東から）



(1) SC06 遺物出土状況（南から）



(2) SC06 完掘状況（南から）



(3) SC06 窟の状況（南から）



(4) SC14 東側（南から）



(5) SC14 西側（西から）



(6) SC14 窟の状況（東から）



(7) SX15 防空壕西側（東から）



SC06 出土遺物（縮尺不統一）

報告書抄録

ふりがな	ざっしょのくま						
書名	雑餉隈8						
副書名	第19次調査報告						
巻次	雑餉隈8						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1282集						
編集者名	山崎龍雄						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL092-711-4667						
発行年月日	西暦 2016年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ざっしょのくま 雑餉隈遺跡 第19次調査 17番	ふくおかはかたくしまようなんまち 福岡市博多区昭南町2丁目	40134 020054	33度33分 44秒	130度20分 5秒	2014.06 ~ 2014.10.20	45	住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
雑餉隈遺跡 第19次調査	集落	古代	堅穴住居跡	古代須恵器・土師器			
要約	狭い調査区ではあったが、奈良時代の堅穴住居跡2棟を調査した。いずれも竈がつく。						

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1282集

雜餉隈遺跡8

－雜餉隈遺跡第19次調査報告－

平成28年3月25日

発 行 福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 株式会社宣巧社
福岡市博多区吉塚8丁目7-30

